

ワンポイントレッスン（平成24年1月）



崇 武 館
館長 飛鳥宗一郎

先人の言葉から学ぶ（その1）

はじめに

新年明けましておめでとうございます。

昨年は、国内で災害の多発した年で、その中でも千年に一度といわれる大地震によって、多くの人命を失い、家屋財産の破滅などの犠牲が払われた。或いは、放射性元素の崩壊に伴う放射線という目に映らない物質から逃れ故郷を追われる人たちなど、人災と言っている事故も重なり、余りにも悲しい出来事ばかりであった。

国を挙げて官民一体となって温かみのある救済対策が緊要課題なのに、お粗末な政治家の言動と欺瞞は、被害者ばかりでなく国民感情を逆なでする嫌悪感を与えた。

今月は、阪神淡路大震災から17年目である。これら、長く国民生活に影響を及ぼす大災害は、国難とっていい大事変であり、決して風化させない心構えを失いたくない。

平成24年この新たな年は、天災、人災のない平穏な年で、お互いが信じ合える風潮が広がる日々でありたいと強く願わずにはいられない。

そのためには、今何をすべきか。私たちにできることは一人ひとりが慎ましく、仁愛の心と労わりの言葉を持ち、他者の痛みを分かち合える気持ちを忘れない姿勢かと思う。

新年度の4月から、全国の中学校で1・2学年男女とも保健体育授業で武道が必修科目となり、3年生になってからも選択できる制度に変わる。このことは、「ワンポイントレッスン」コーナーで繰り返しお知らせしてきた。6月に「中学校武道必修正課に向けて」という小誌を上梓し、県内の教育機関と県下の中学校長あてに送付し、武道授業導入の意義と、空手道が採用された場合の有効性を訴えてきた。開始されるまで幾ばくも日数は残っていない。

この制度が導入された理由には、我が国が太平洋戦争（1941. 12. 8～45. 8. 15）に突入し、降伏により終戦を迎えた歴史上の事実と無関係ではない。

終戦既に 67 年が経過し、直に戦中戦後を知るのは 70 歳を超えた人だけになってしまった。

戦争終結の調印は昭和 20 年（1945 年）9 月 2 日に行われ、直ぐさまアメリカをはじめとする連合軍は、ダグラス・マッカーサー元帥を最高司令官とする連合軍最高司令官総司令部（以下、「GHQ」と記す。）を設置した。

GHQ は、いち早く武道を排除する政策を執り、武道具の破壊を命じ、武道の実施を全面禁止した。その後、GHQ 主導下で昭和 22 年（1947 年）3 月に 11 条からなる「教育基本法」が制定されたが、その中には「国家」とか「公共の精神」などに関する記載はなかった。なお、「日本国憲法」の発布は同年 5 月である。

昭和 26 年（1951 年）9 月サンフランシスコ講和条約



サンフランシスコ講和条約の調印

の締結により我が国は独立を取り戻した。その後禁止されていた武道は遂次学校教育に復帰するが、任意に行う部活動に限られていた。

授業の中に採用されるのは昭和 33 年（1958 年）からで、名称は「格技」であり、本来の「武道」の名称が復活するのは昭和 61 年（1986 年）からであった。

ところが、旧「教育基本法」制定から 60 年を経過した平成 18 年（2006 年）にその全部が改定され、この中に『伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する』と明記されたことが今回の必修化につながったと考えられる。

このことは、GHQ 主導下による法制の弊害を見直し、新しい教育理念の元で健康で明るく逞しい心身の育養を目指すため、武道に限らず我が国の優れた伝統と文化を土台として、自国を愛し誇りをもって国の発展に寄与できる人材の養成にあること疑う余地はない。特に、我が国の伝統文化には、互いに高め合う精神を不可欠としてきた事実も看過できない。

以上の観点から、私は昨年 11 月 19 日に開催した「崇武館創立 40 周年記念祝賀会」における記念講話で、空手道（武道）修業上の柱として幾つかの言葉を取り上げたが、時間の制限もあり中味の大方を述べられなかった。

今月から、私がどのようなことに意に止めてきたか、どのような考え方で生きてきたかを取り上げ、1 年程このコーナーでお付き合いいただこうと思う。



マッカーサー元帥と昭和天皇

だが、その内容は決して読み易いものではないと思う。適当に斜め読み、飛ばし読みで結構だと思うので、できる限り読み続けていただきたい。記述内容に誤りや疑問の他、質問などあればメールをくださればお応えしたいと思う。

なお、6月まで連載してきた「空手道指導論」は、日頃の指導や講習会で述べていることであり、何時でも復活ができるためこのシリーズ終了後に再開したい。

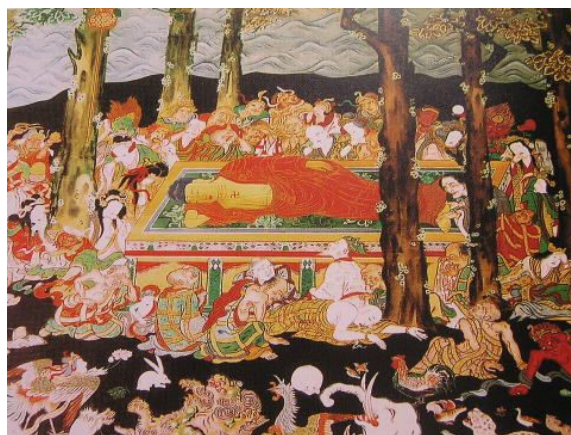
1 慙恥質直・・・出典：仏遺教経

(1) 本部道場の扁額

崇武館道場の創設は昭和46年(1971年)9月1日で、経年(築33年)に伴い平成16年(2004年)7月から建替工事に着工、同年12月末に完工し、翌17年1月9日新道場竣工記念行事を開催した。前々から新道場には扁額(横額)を掲載したいと思っていたところ、弊館後援会から寄贈の申し出を受けたので、言葉(字句)の選定に当たり、以前に読んで心に残っていた「仏遺教経」を読み直し、その中の二箇所から言葉を選び「慙恥質直」(ざんちしつじき)とした。長年崇武館の胸マーク、看板、道場訓、館歌などの字を書いていたいただき懇意にしている、書家・原田柳泉先生(墨華会会長)に揮毫をお願いした。

(2) 仏遺教経とは

「仏遺教経」は、正規には「佛垂般涅槃略説教誡経」(読み:ぶつしはんねはんりやくせつきょうかいきょう)といって、仏教の開祖・釈迦牟尼(前463~383。ブッタ)が80年の生涯を終え入寂(逝去)間近いことを悟られ、弟子たちに最後の説法をされたのを、十大弟子の一人であるアーナンダ(阿難尊者。釈迦の従弟で、釈迦の言葉一言一句を過たずに記憶できたため「多聞第一」といわれた。)が記憶して後世に伝えたもので、釈迦の最後の説法という意味から略して



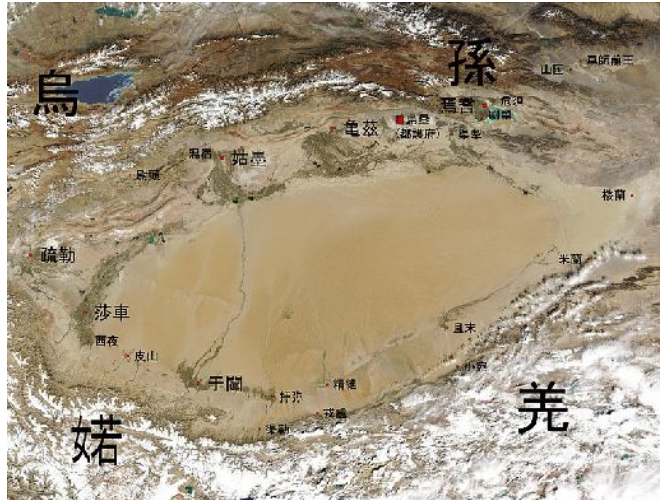
釈迦牟尼涅槃図

「仏遺教経」又は単に「遺教経」と言われている。ここでは「遺教経」と表記する。

この経典は、他の経と同様に中国から我が国に漢文で伝わったもので、2300字余と経典としては短い部類に入る。

普通には「読み下し」で誦されるが、サンスクリット語(梵語)から最も多くの経典を漢語に翻訳した鳩摩羅什(註:参照)の訳になるもので、「遺教経」は名訳の一つでないかと私は思っている。

註：鳩摩羅什（読み・くまらじゅう。350～409年、かつてオアシス都市として栄えた都市国家で現在の中国新疆ウイグル自治区アスク地区クチャ県あたりにあった亀茲国（きじこく）に、国王の妹の子として生まれた。50歳で後秦の姚興に迎えられ長安に住み、以後サンスクリット法典の翻訳に従事した訳経僧で、何百巻もの漢訳を行い後世の仏教界に残した功績は計り知れないものがあった。漢語に造詣の深かった人であろう。



当時の亀茲国の位置

鳩摩羅什の後、唐代になって玄奘三蔵（602～664年。「西遊記」の三蔵法師のこと。）が天竺（インド）に渡り膨大なサンスクリット經典を持ち帰って翻訳しており、この二人を二大訳聖と呼んでいる。鳩摩羅什から三蔵まで訳経を旧訳、三蔵以降を新訳と呼ばれている。例えば、観音様のことを羅什は「観世音菩薩」、三蔵なら「観自在菩薩」と違いがある。



鳩摩羅什画像



玄奘三蔵画像

(3) 慙恥質直の拠り所と意味

「遺教経」の構成は次の四つに分けられる。

- ① 最後の説法を始める様子
- ② 仏弟子が守るべき戒律

③ 仏弟子が悟りを得るための方策

④ 最後の訓戒としての諸行無常観

「慙恥」も「質直」ともに②の守るべき戒律の中から選んだ。

ア 慙恥

慙恥は、「惰眠を食らないうで修業に勤めること」を述べている項に次いで出てくる。選んだ部分の読み下しは次のとおり。

『慙恥の服は諸(もろもろ)の莊嚴に於いて最も第一なりとす。慙は鉄鉤の如く、能く人の非法を制す。この故に常に当(まさ)に慙恥すべし。暫くも替(す)つることを得ること勿れ。慙恥を離すれば、則ち諸の功德を失す。有愧(うぎ)の人は則ち善法あり、若し無愧の者は諸の禽獸と相異なること無けん』とある。

これを私の解釈で現代語に訳せば次のようになる。

恥を知るといふ服を着る(全身に纏う)ことは、立派な装いや装飾品で身を飾るよりも心と姿を最も美しく莊嚴にするので、第一番に大切である。恥じる心は鉄で造ったカギのように悪いことを制御し、人の道から外れないようにしてくれる。そのため何時も恥じる服を身から脱ぎ捨てることないようにしなければならない。もしも悪いことをして恥じることを忘れるなら、いかに努力しても善い報いは失われるであろう。恥を知る人には必ず善き真実が訪れる。反対に、悪いことをしても恥を知らない人間ならば、鳥や獣と何ら違いはないのである。

「慙」は、心にザクザクと切り込み入れられた意味、「無慙」(罪を恥じない)、「慙悔」などの熟語を造る。「恥」は、きまり悪く思うとか、ばつが悪くて「心がいじける」意味で、「恥辱」や「羞恥心」(羞は、恥じで心が縮まること)、「破廉恥」などとなる。

「愧」は、気がひけて心が縮まる意味で、「慙愧」や「愧汗」となる。いずれも少しずつ意味は違っても、「恥じいる」「恥ずかしい」の同じ意味となる。

イ 質直

質直の言葉は、「人に追従(ついしょうと読む。へつらい、おべっかを使う意味)せず、正直であるべきこと」を述べている項に出てくる。読み下しでは次のとおりである。

『諂曲の心は道と相違す。是の故に宜しく応(まさ)に其の心を質直にすべし。当に知るべし、諂曲は但(た)だ欺誑を為すことを。入道の人には則ち是の処なし。この故に汝等宜しく応に端心にして質直を以て本と為すべし』

現代語に訳せば次のとおりである。

自分の本心を曲げて人に媚びへつらう行為は、真の道を歩もうとする人(修行する人)のすることではない。だから、自分の心を真っ直ぐ正して歩むべきである。へつらいの心は、ただ欺きと偽りを招くだけと心得るべきである。仏の道に入った人は、欺きの心があってもよかるうはずがない。したがって、あなた方は心を正しく整えるよ

うに心掛けて、質実に真っ直ぐな生き方を基本とすべきである。

この質直の「質」は、持って生まれた中味そのものをさすため、「質朴」（飾り気がない）や「質実」（誠実）の言葉につながる。「直」は真っすぐなさま、曲がったものを元どおりにする意味であるから、「正直」や「直心」などとなる。

それに、「端心」も心すべき言葉である。「端」は垂れ下がった布の端（名詞）からでて、「両側の垂れ下がった布の端が揃うように左右均斉が取れている正しいさま」（形容詞）であることから、「端一」（正直）とか「端正」（容姿や態度が整っている）となり、悪ければ「異端」（正道から外れる）となる。私は、いつも端正な日常の振る舞いでありたいと何時も思っている。真に「直」に生きられるようになったとき、初めて本当の心の自由が得られる。

とかくこの世は、我が身を繕うため様々な画策や方便ばかり、一時逃れに走り易いのが常態であるから、自分の心に欺かず、妬みおもねる心に打ち克ち、本性（生まれたままの性質）に背かず純粋に生きたいものと願う。

ウ 二つの言葉を心して生きる

「遺教経」は、『汝等且（しばらく）く止みね、復（ま）た語（もの）いうこと得（う）ること勿（なか）れ。時將（まさ）に過ぎなんと欲す、我れ滅度せんと欲す。是れ我が最後の教悔（きょうげ）する所なり。』という実に清々しい心境で終わる。

現代語に訳せば

弟子たちよ、今は嘆き悲しむのを暫く止めて、無言のまま私の最後を見守りなさい。与えられた時間は正に終わろうとしており、私は何の憂いも思い残すこともなく長い涅槃（永久の眠りに）入ろうとしている。これをもって私の最後の説法を終わろう。

日々の生活の中で、確たる思想や信念を心に抱き生きることが、その人の大本である。武道もスポーツも、鍛錬や試合（競技）の過程を通して、人間性の完成を目標にして精励する。即ち、「心の律」（謙譲、けじめ、思いやり、無邪心、慈しみ、奉仕）が慙恥であり、「星の輝き」（理想、努力、友愛、希望、歓び、達成感）が質直な心と言うことできよう。（注：参照）

私たちは、空手道が大好きで、大好きなものを次世代に引き継ごうとしている。『空手道を学んでから、私はこのように変わった。』と明言できるよう、「慙恥質直」を心して精進したいものである。

もし、仏教の専門教師が「遺教経」から真意とする言葉を選ぶとすれば、この二語にはならないと思う。これはあくまでも私の感性からの選択であって、生涯にわたって引きずって行こうと思ったまでのこと。「慙恥質直」は四文字熟語辞典にはない、私自慢の字句である。

注：「天にあっては星の輝き、地にあっては心の律」、これは哲学者・カントの言葉である。これは、後日このシリーズで取り上げるつもりでいる。

(4) 恥と品性

社会生活を行う上での規範は、憲法であり法律・法規の類である。他には、法規の類になくとも良風とか常識的行為を身に着けるように育てられ、公序良俗に背かないような行動を教えられる。

それらとは違う意味で、封建時代に武士階級の中で育まれた武士道という生き方や感覚も、現代に至り無視できない関連する部分がある。

武家社会では「恥知らず」(恥を恥と思はず平然としている)、「恥さらし」(恥を世間に広く示す)、「慙愧に堪えない」(この上なく恥ずかしく思う)、「破廉恥」(道徳に反する行為を恥と思わない)などの他にも多くの道義律や徳目が存在した。しかし、更にその上に位置付けられ求められたのは高い品性であった。

品性は教えられて身につく代物ではない。個々の人間の起居動作の全てに関わる手本や字句に記されたものとは別種の、総人格が無意識に表に現れ出る得体のない表現形態である。

一頃、藤原正彦氏の「国家の品格」をはじめ見識、品性、好ましいマナーに関する書籍がブームを呼んだ。いずれも決まった定めがある事柄ではない。

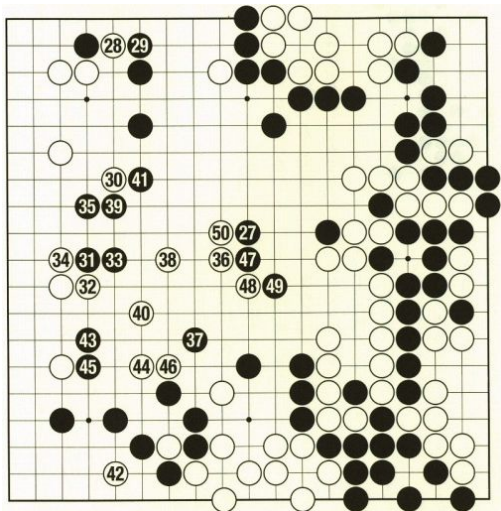
私は、「慙恥質直」を日常身に纏って暮らし、文武両道を目指して生きるなら、知らない内に品性は備わると思う。ただし、意識して品性を求めようと思い、評価されようと願う気持ちの内にあつて品性など生まれようもない。

(5) 耳赤の一手

私は、武道以外に唯一つ囲碁初段の免状を持っている。それも30年前、以来碁を打っていないから人前で言うも憚られる段位である。

囲碁の世界で著名な「耳赤の一手」という話がある。幕末に近い弘化3年(1846年)大阪での出来事であった。当時の囲碁界四代家元の一人で関西を本拠とする井上因碁(1798~1859。準名人八段)と、江戸の本因坊家の跡目で、後に碁聖といわれながら34歳で早世した本因坊秀策(1829~62年、当時四段)との一戦で、秀策が放つた下の碁譜の黒②の好手をみた因碁の耳が途端に赤く染まり、付き添いながら観戦していた因碁の主治医は、『因碁先生の耳が赤く染まったのは、心が衝撃を受け動揺した証拠。私に碁は分からないが、因碁先生に勝ち目は無い』と言った。結果はその通り秀策の3目勝ちだったという。

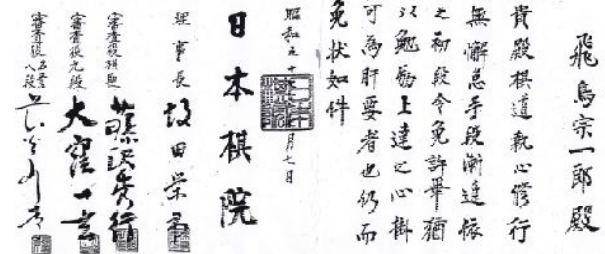
「恥」の耳偏は「やわらかいみみ」、心との会意兼形成文字で「心が柔らかくいじける」ことである。ここでは関係ないが「羞」は「恥じで心が縮まる」であり、主治医の言葉は『咄嗟に耳が赤くなったのは動揺し、自信を失った証拠』の意味となる。



(6) 戦後日本と恥の文化

音に対する受容機関である耳は、側耳（聞き耳をたてる）や耳耳（じじ）と二つ重ねて「柔らかく穏やかに従う」意味にも使う。私にはいかにも因碩の「耳赤」の出来事は、「心がいじけて予想外の恥ずかしさ」の感情が無意識の内に現れたとイメージしてしまう。

う。



ア 恥の文化とは

日本人は「恥じの文化」、西欧人は「罪の文化」と対比させた人がある。それはルース・ベネディクト（1887～1948年）というアメリカ・コロンビア大学教授の文化人類学者で、「菊と刀」という著書の中であった。

彼女は太平洋戦時末期のアメリカ戦時研究の中で、終戦の前年（1944年）にこの本を書き、終戦の翌年（1946年）に出版、日本では昭和23年に邦訳出版された。

この本は、国内発売と同時に評判を呼び、教師も生徒の前で口にするほど知れ渡った。

日本人の「恥じの文化」(shame culture) とは、欧米人の内面に善悪という絶対的な基準と観念を持つ「罪の文化」(guilty culture) に対して、日本人は他者からの評価を基準として行動が律され、「義理」「恩」「忠節」「人情」などの観念と、正義よりも名誉が優先され、個人の道徳心は他者により左右されてしまうため、自律的な人格は育ち難いと指摘した。更に集団のリーダーは、集団の評価や名誉を高めることこそ最高の目標と考え、個人の権利や人格を軽視することで、個人の権利や主張は単なるエゴイズムとみなされると記している。

更に、日本人の行動様式では、「恥」の道徳律が最優先し、その中では道徳心は育っていないので、他人に知れない限り罪の誘惑に負かされ、道徳の基準も罪の意識も持たないと記している。

一方、欧米人の「罪の文化」は、キリスト教文明が根強く支配しており、行動規範は神の戒律を守り、心は清澄にして一点の曇りない最善の姿であり、反すれば強い罪の意識を持つことになるので、常に心の中で神と対峙して生きる文化であるとしてい



ルース・ベネディクト

る。そして、欧米の内的な良心を意識する文化は、道德律のない「恥じの文化」に比べて倫理的に優れていると主張している。

イ 「菊と刀」の書かれた時代背景と問題点

書かれた時期は戦時下であり、しかも日本の敗色は鮮明になっていた。いずれ訪れるであろう占領下体制を有利に運ぶ意思がありありと伺える。

私が「菊と刀」に初めて目を通してから数十年が経過している。当初はよくぞ微に入り細にわたり他国の事情を調べたものだと感心したが、次第に読み進む中で日本人を未開民族のように見下す内容に気づき、加えて時代考証が一定しない混雑が現れはじめた。

最後まで読んで、文化人類学者として現地の実証検分が欠かせないはずのベネディクトは、一度も日本の地を踏んだことはなく、文献、在米二世から聞き取り、映画（多くの時代劇）、日本在住経験のあるアメリカ人、等々から得た知識によって書き上げられたと分かり唾然とした。

それが、出版後は国内外において日本文化の評価基準に多大な影響を与え、日本人の精神と文化の実態を示す資料（書籍でなく）と考えられたのは、由々しき出来事に他ならない。邦訳発売の年、ベネディクトはニューヨークにおいて60歳で病没している。

戦争とプロパガンダ（一方的な宣伝）は、作戦の一つとして何処の国でも行われている。

「菊と刀」の書かれた時期から、ベネディクトはアメリカ政府の敗戦支配を念頭においた御用学者として指名され、その上での仕事であったこと疑う余地はなく、戦勝側は天皇に対する「忠義忠節」や、「特攻精神」「神国日本」、「仇討」や「腹切り」（切腹を外国ではこう呼んだ）に象徴される日本人観があり、報復を極度に警戒したはずである。

ところが、問題はこの著書は発売から国内でベストセラーになったことである。それにこの書に対する批判がましい話題もなく、ベネディクト日本人観をあっさりと受け入れてしまった世情は余りにも卑下し過ぎていないか。占領支配下の遠慮という理由だけではなさそうであるのに、何故あっけなく「菊と刀」を自国の実像として受け入れてしまったのか。

それとも、自ら『恥を知る尊さ』を絶対的な誇りとするあまり、ベネディクトの蔑みからの『恐ろしい良心、他人に知れなければ罪の誘惑に負かされ、道德の基準も罪の意識も持たない恥の文化』という隠された真意を見抜けなかったからだろうか。

日本の行ったプロパガンダで口の端に上ったのは「東京ローズ」であろう。この呼び名は米軍兵士が名付けたもので、NHKラジオ日本による短波放送により、英語を話せる複数の女性アナウンサーが惑乱戦術を行っている。

「菊と刀」は巧みに練り上げられた占領政策を意識したもの、自国の戦争行為を正

当化する手段と私は思っている。

欧米人と日本人の文化比較論における相違については、狩猟民族と農耕民族、大陸系のアルカリ性土壌と火山列島の酸性土壌で育つ体質、島国と複数国境の接し合い、一神教のキリスト教と神道及び仏教国の多神教など、国民性の違いは沢山あって当たり前である。

最後に、「罪の意識」と「恥じる意識」は共通のものとして指摘しておきたい。

神（キリスト）の前において「罪」（戒律違反）を犯してはならない意識と、忠節を含めた倫理や道徳に悖（もと）る行為は陰ひなたなく「恥」とする意識は、人道において相違はない。

詳細付言する必要もなからうが、双方とも日常の心構えに伴う世道（世の中で守るべき正しい道）であって、いかなる土地柄や国柄においても悪風でない限り文化に優劣は絶対にあり得ない。

長野晃子（1938年～、東洋大学名誉教授）のように「菊と刀」を大胆に指弾した人もいるが、大方は今に至り勘違いだったり、容認しているとすれば極めて残念至極である。

これも日本人の一面であるならば、歴史観を見直さざるを得ないのか。



東京ローズの一人、取調べ模様

(つづく)